

[書 評]

「壁のない教室」としての『北白川こども風土記』

飯 田 豊

（立命館大学産業社会学部）

はじめに

マーシャル・マクルーハンは1950年代、「壁のない教室」という惹句を用いて、映画やテレビといった新しいメディアが学校教育のなかで重要な資産になりうることを指摘した。すでに当時、都市においては、印刷物、映画、ラジオ、テレビなどに媒介される情報量が、学校の授業や教科書のそれをはるかにしのいでいた。新しいメディアの娯楽性が、伝統的な授業のあり方をおびやかすからといって、教室から締め出してしまうのもつたいない。教育を受ける目的は、認識の基礎的な手段を備えるためだけでなく、日常生活経験についての判断力や識別力を身につけるためでもあるのだから（マーシャル・マクルーハン+エドモンド・カーペンター『マクルーハン理論—電子メディアの可能性』大前正臣・後藤和彦訳、平凡社ライブラリー、2003年）。

マクルーハンの「壁のない教室」は、新しいメディアを活用して楽しく学ぶことの意義を説いたもので、裏を返せば、メディアに媒介された社会そのものが教育実践の場となるということだ。いわゆる「視聴覚教育」や「アクティブ・ラーニング」をめぐる議論の古典として読むことができる。その一方、そもそも「初期の印刷本は、口頭による授業の「視覚補助教材」だった」という指摘は、活版印刷の普及にとまなう社会認識の変容を考察し、新しいメディアが活字文化以前の口承

的な形式を再び前景化させるという『ゲートンベルクの銀河系—活字人間の形成』（1962年）の視座を先取りしている。

『学校で地域を紡ぐ—『北白川こども風土記』から』（以下、「本書」と呼ぶ）を一読し、真っ先に頭によぎったのが、この「壁のない教室」である。『北白川こども風土記』（山口書店、1959年）の刊行と時期的な符合があることに加えて、地域に開かれた北白川小学校の教育実践のあり方は、まさにそう呼ぶに相応しい。

映像メディアの可能性

『北白川こども風土記』は言うまでもなく、生活綴方運動などの教育実践に強く裏打ちされており、その成果は印刷本という形式にまとめられているのだから、マクルーハンを引き合いに出すのは意外に思われるかもしれない。もっとも、メディア論の視座からはまず、『北白川こども風土記』の副産物として、ふたつの映像作品が製作されていることに注目しておかなければならない。

その一方は、『北白川こども風土記』の完成にいたるまでの3年間の歩みを紹介する8ミリ映画『郷土学習のしかた』（1959年）である。これは北白川小学校の教員たち自身によって製作され、数名の児童も撮影補助として参加していたという。

他方は、小坂哲人監督『北白川こども風土

記』(松本プロほか、1960年)という教育映画で、劇場公開はもとより、テレビ放映、学校へのフィルム貸出もおこなわれたという。菊地暁は序章「学校で地域を紡ぐ—北白川から、さらにいくつもの〈子ども風土記〉へ」において、この映画の製作と配給の経緯に言及しており、脚本を手掛けた依田義賢が、次のようなコメントを遺していることを紹介している。「テレビに現れるホーム・ドラマが大量に制作され、児童がそれに接している今日の状況からして、教材として利用する児童劇は、独特のスタイルをもつようにしないと、児童の関心や興味を強くひくことは、日に日に困難になっていくのではないかと案じます」。菊地によれば、劇映画としても一定の水準に達している本作は、「テレビの時代」を見据えた新たな教育映画を探求したものであると評価できる。

『北白川子ども風土記』のメディア的特性

こうしたメディアミックスに加えて、『北白川子ども風土記』という書物自体のメディア的特性も、本書では考察の対象となっている。

佐藤守弘は第6章「綴ることと彫ること—『北白川子ども風土記』の視覚」において、文章に添えられた版画を中心とする視覚性に焦点をあてている。佐藤によれば、『北白川子ども風土記』は、挿絵、図解、地図、写真、複製図版、そして児童たちによる版画など、さまざまな視覚的イメージがあちらこちらに散りばめられた、すぐれてヴィジュアルな書物である。生活綴方と生活版画を組み合わせた教育運動にもとづいて制作された書物の先例としては、『山びこ学校』(青銅社、1951年)や『夜明けの子ら—生活版画と綴方集』(春秋社、1952年)などが挙げられる。指導者たちの意思が多く反映されている生活版画的「作者」は、生徒や児童といった単一の主体ではなく、指導者も含んだ一種の集団的な制作——ヴァナキュラーなイメージ制作の実

践——と考えられる。そのうえで、手軽なガリ版印刷によって学校で簡単に複製できる版画文集は、本来であれば、小学校とその周辺という狭いコミュニティにのみ流通する〈ミニ・メディア〉であった、と佐藤は指摘する。マスに流通した『山びこ学校』や『夜明けの子ら』、そして『北白川子ども風土記』は、その氷山の一角である。

そして池側隆之は、第7章「関係性を紡ぐ—メディア・プラクティスとしての『北白川子ども風土記』」において、「記録者の自己に向かうベクトルと、コミュニティを中心とする社会という外に向かうベクトルの狭間にメディア・プラクティスとしての『北白川子ども風土記』への取り組みが機能していた」と評価している。ここでいう「メディア・プラクティス」とは、水越伸・吉見俊哉編『メディア・プラクティス—媒体を創って世界を変える』(せりか書房、2003年)に依拠した概念で、メディアを活用した実践全般というよりも、「メディア状況を積極的に組み替える、編み直す、デザインするといった志向性を持った活動」を意味する。「書籍というメディアに目が行きがちであるが、[……]何よりも「取材・調査」の過程の段階で、その都度発見的効果をそこに関わる生徒たちにもたらず教育性があった」というわけである。池側はこうした再評価を通じて、『北白川子ども風土記』をめぐる実践を、いわゆる「コミュニティ・メディア」の系譜、ひいては「ソーシャル・デザイン」といった近年の動向と接合することを試みている。

そもそも「コミュニティ」とは何か

以上のような考察が評者にとって興味深かったのは、1959年に刊行された『北白川子ども風土記』のメディア的特性に注目することによって、戦後日本における「地域」ないし「コミュニティ」の画期がおのずと浮き彫りになってくるためである。

というのも、「子ども風土記」というタイ

トルを冠した書物の刊行は、1960年代以降も続く。菊地によれば、数量的なピークを迎えるのは70年代以降のことであり、「そこには、高度成長期をターニングポイントとした子どもをめぐる変化、学校をめぐる変化、そして社会をめぐる変化が幾重にも折り重なっている」。このことについて佐藤は、「一九六〇年代に入って、北白川だけでなく、全国のあちこちで、従来のコミュニティとは違う、「異質的（Heterogeneous）な生活者たちの偶然的集合地域」が増えてくるなかで、出自や社会階層に関係なく共有できる物語として、地域の過去を提示する「こども風土記」が次々に作られていったのではないだろうか」という仮説を示している。

注目しておく必要があるのは、日本ではまさにこの頃、「コミュニティ」という外来語が、日常的に使われる言葉に変化していたことであろう。佐藤栄作内閣の「社会開発」路線、そして大都市の人口集中、郊外の宅地開発などによって、新旧住民の対立ないしコミュニケーションの不在が社会問題化し、地域社会の再構築の必要性が広く認識されるよ

うになった時期である。

実際、コミュニティ・メディア研究の第一人者である田村紀雄は、『コミュニティ・メディア論』（現代ジャーナリズム出版会、1972年）のなかで、「コミュニティ・メディアは、その古い伝統社会にある「地方」ではなく、現代における都市社会のうちに芽生えつつあるコミュニティを育てる手段にほかならない」と断言している。「コミュニティ・メディア」や「地域メディア」をめぐる理論や実践のなかで、こうした含意は次第に知的関心の中心ではなくなり、今ではすっかり等閑視されているように思われる。

しかしながら、劇的に変化するインターネット社会のなかで、「コミュニティ・メディア」や「地域メディア」のあるべき姿が見通しにくくなっている現在、学校を拠点として長年はぐくまれてきた教育実践の系譜に目を向け、マクルーハンが「壁のない教室」と呼んだメディア社会とどのような関係を切り結んできたのか、改めて検討する価値があるといえよう。本書は間違いなくその大きな手掛かりとなる。